

貝原守一医学振興財団

会報 第15号

目 次

- 巻頭言 P 1
「貝原財団と東日本大震災」
橋場邦武（理事 長崎大学名誉教授）
- 平成 22 年度 研究助成金贈呈式記念写真 P 2
- 平成 22 年度 研究助成金贈呈式の挨拶 P 3
理 事 長 佐伯 清美
- 平成 22 年度の研究助成候補者の選考について P 4
選考委員・天児 和暢（理事 九州大学名誉教授）
- 研究論文選考にあたって P 6
「受賞を祝して」
選考委員・橋場 邦武（理事 長崎大学名誉教授）
「助成選考にあたって」
選考委員・小野 順子（福岡大学名誉教授）
- 平成 22 年度助成金贈呈者一覧 P 8
- 平成 22 年度助成受賞者の論文抄録 P 9
石井敦士氏（福岡大学病院小児科学教室）
石井文人氏（久留米大学医学部皮膚科学教室）
藤田逸人氏（九州大学大学院医学研究院臨床腫瘍外科）
松下拓也氏（九州大学大学院医学研究院臨床神経免疫学）
- 貝原守一賞受賞者 P 13
Antara Chakraborty 氏（九州大学大学院医学系学府）
- 宮崎一郎奨励賞 P 14
平成 21 年度 波部重久氏（福岡大学医学部微生物免疫学講座）
石田英和氏（九州大学大学院医学研究院感染免疫・熱帯医学分野）
平成 22 年度 金澤 保氏（産業医科大学）
下川周子氏（現 長崎大学熱帯医学研究所）
- 財団の 22 年度行事 P 15
- 「有難うございます。」 柳原弘毅（財団理事） P 17
- 「わたくしの月刊誌」 塚田武司（財団理事） P 19
- 貝原守一遺稿より「戦争と醫學」 P 21

～ 巻頭言 ～



「貝原財団と東日本大震災」

財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

平成二十三年は、千年に一度とも云われる大震災の年となり、すべての日本人が辛い思いで過ごす忘れられない年となった。ノーベル賞の受賞が相次いで、小中学生まで日本中が何となく明るく誇らしい気持ちになれた直後とも感じられるような、今年の大震災である。そして、日本中が茫然としてしまった中であって、被災地の人々の、じっと耐える韌さは、世界の人々に驚きと尊敬の念を持たれるほどのものもあったと、報じられている。

一方では、現代科学の最先端にあるべき筈の原子力利用の場に生じた現象の把握が、なぜこれ程までに不正確で遅いのかという疑問が国の内外から抱かれるようなことも多過ぎた。国際的な協力の申し出も素直には受けなかった気配もあり、我が国の知的危機さえ危惧させるものもある。

貝原財団と今回の大震災を結び付けるものは特別には何もないが、ただ、財団運営の基本が大きく変革して、研究助成額が飛躍的に増額されての最初の研究費授与式が本年二月に行われ、三月の大震災発生と考えると、偶然のことではあるにしても、平成二十三年は財団にとっても、記憶されるべき節目の年となるであろうと思われる。

震災発生から三カ月、長い再建への地味ながら着実な初動も感じられている。ともすればすべてが自粛のムードの中であって、貝原財団の研究助成活動が今まで以上に、若い研究者にとって新しい意欲と誇りの自覚の源泉となっていくことを期待したい。

貝原守一先生の学問への情熱と明晰な思索はもとよりであるが、先生が三十三歳で南方へ赴任される機上の御戦死をされる直前に、おそらく悠久への思いを抱かれて、奈良の古寺を訪ねられた知性の高さを思うと、今日この時代にあっても、財団が常に意識すべき活動の本道を指し示す、先生からの変わらぬ御激励がここにあると感じられるように思う。



平成23年2月5日（福岡ガーデンパレスホテル）

平成22年度 貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式

平成22年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式の挨拶

一般財団法人貝原守一医学振興財団 理事長 佐伯 清美



本日、平成22年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式に受賞者の皆様、財団役職の皆様、公私ご多忙のなかを御出席いただき、式を開催出来ますことは大変有り難く、篤くお礼を申し上げます。

今回、多数の論文応募者の中から厳しい選考を経て、選ばれました四名の皆様、受賞まことにおめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

平成4年より始めました当財団の研究論文助成授与者は、本年で76名になります。

この76名の研究者皆様の研究が、日本の医学は勿論、世界の医学の進歩、発展に大きく貢献していることを確信し、今後も貢献してゆくことを期待いたしております。

当財団の設立目的であります「研究助成金授与により医学の進歩発展に寄与し、以って社会の福祉に貢献する」という目的を立派に果たしているものと確信しております。

平成22年度より、国の政策により財団の在り方が変わり、本財団は財団法人より一般財団法人となりました。その意味では今回の贈呈式は一般財団法人となって初回の贈呈式でもあります。

また、研究助成金は従来の100万円より200万円に増額になりました。本日、研究助成を受けられる四名の皆様、本日受けられる助成金を十分に役立てていただき、立派な研究成果を上げられることを期待いたしております。

今回も厳正公平な審査をしていただき、優れた贈呈者を決めていただきました選考委員の先生方に篤くお礼申し上げます。

また、毎年滞りなく研究助成金授与が出来ますことは、担当理事のご尽力と各理事、役職の方々の力強いご助力と温かい御協力のお陰であり、心よりお礼申し上げます。

毎年優れた研究論文を提出して下さいます各大学や医学研究施設の皆様にも、お礼申し上げますと共に、今後一層の御協力をお願い申し上げます。

終わりに、本日受賞の皆様を重ねてお喜びを申し上げ挨拶といたします。

平成22年度の研究助成候補者の選考について



選考委員・財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

平成22年度の貝原財団研究助成金候補者の選考会議は平成22年12月18日に開催された。今年度から助成金の額が200万円に増額され助成人数も従来の3名から4名に増員された、これらのこともあってか、今回は19名という近年では最も多い応募者数となった。

応募施設別では九州大学13名、久留米大学4名、福岡大学1名、福岡歯科大学1名で、歯科大学から初めての応募があった。

研究の内容別では、腫瘍関連の研究が6件で最も多く、そのほかに神経疾患関連で3件、再生医療関連が4件あった。また、医療の経済学的側面を調査する経済学者からの応募があったのはこれまでにはなかったことである。審査資料は、会議開催の2ヶ月ほど前に配布されているので、各委員は事前にその資料を基に各候補者の研究内容を十分に検討し審査会議に臨まれたこととなる。

会議は、理事長のご指名により橋場理事が担当された。例年通り先ず各自の審査の評価結果をABCの表示で候補者毎に示した後に、各申請研究課題について、その独創性、重要性、研究を実施するに当たっての技術的評価等を中心に検討した。最終候補者を選定するまでに2時間ほどの時間をかけ十分に議論し、石井文人、松下拓也、石井敦士、藤田逸人(申請順)の4名の方を受賞者として選出した。以下にその研究内容を紹介する。

石井敦士氏(福大)の研究課題は、「小児交互性麻痺の責任遺伝子検索と分子病態の解明」で、小児期に発症する片麻痺、認知障害の遺伝的背景を検索し、発病の機構を明らかにしようとする研究である。その原因として神経細胞膜に存在するナトリウム・カルシウムイオンを細胞内摂取に機能する装置(チャンネル)に注目しその遺伝子レベルでの異常を検証する。試料となる患者の遺伝子DNAは国立精神神経センターに保存されておりそれを利用して行われる。神経細胞でのこのチャンネル遺伝子の異常を検出することにより正確な診断が可能となりまた、病態の解明ひいては治療法の開発にも繋がる研究である。

松下拓也氏(九大)の研究課題は、「多発性硬化症とBalo病におけるアストロサイト障害の解析」で、難病である多発性硬化症の一つであるBalo病と呼ばれている神経病の発病機構を

解明しようとする研究である。神経組織中にある神経細胞を支えているアストロサイトと呼ばれる細胞に注目し、その細胞の水分子の取り込みに関与しているアクアポリンという分子の変化を解明する。この分子の変化は、松下氏自身で発見しており、それを更に発展させこの病気の原因を分子レベルで解明しようとする研究である。

石井文人氏（久留米大）の研究は「水疱性天疱瘡における BP230 自己抗原の意義」という課題で、高齢者に多い皮膚に水疱が発生する天疱瘡と呼ばれる病気の発生機構を解明しその治療法或いは予防法を確定しようとする研究である。そのためマウスでモデル動物を作り、この病気の発生に関与していると考えられている、二つの皮膚の抗原タンパク BP180 と BP230 のうちまだ解明されていない BP230 について解析し、なぜ高齢者に多いかを調べ、その予防治療に寄与せんとするものである。

藤田逸人氏（九大）の研究は「膀胱癌関連間質幹細胞を標的としての新規分子生物学的治療法」で、癌の化学療法として、がん細胞に直接作用する薬剤ではなく、がん細胞を支えている間質組織の細胞を攻撃し、がん細胞の増殖や拡散を押さえ治療しようとする研究である。間質細胞の一部に CD10 と呼ばれる抗原を持った細胞が発生しこれが癌の悪性化に関していることを自ら発見しているので、これを含めその他の標的となり得る間質細胞を網羅的に調べそれらを抑制する薬剤の開発も目指すものである。

今回選ばれた研究課題は、いずれも医学の領域では重要な課題であり、その研究成果は病気の予防や治療に寄与すること大であると信ずる。是非研究費を活用され立派な成果を挙げられることを期待する。



「受賞を祝して」



選考委員・財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

この度の貝原財団研究助成の御受賞を心からお喜び申し上げます。今回は助成額が従来よりも大幅に増額となり、受賞者数も増加してからの初めての助成であり、受賞された先生方は勿論ですが、財団関係者の全てにとってもまことに喜ばしい記念すべき受賞式であります。

先生方のこれからの御活躍が、貝原財団の研究助成事業の今後の発展にとりましても、特別に大きな意義を持つことを意識して頂ければと思うものであります。

受賞祝賀会では、毎回申し上げる事ですが、先生方に財団から差し上げてあります貝原守一先生の遺稿集の「医学と科学精神」を是非お読みになって、貝原守一先生のお名前だけではなしに、受賞された先生方よりもお若くして逝くなられた先生の、研究者としての、また、人間存在としての、高さ、深さを心に留めておいて頂きたいものと、思います。

先生のお写真をじっと拝見され、ご略歴をお読みになるだけでも心に伝わってくるものがあると、思います。

もう一つお願いしたいことは、今回の応募課題に関連した論文を学術雑誌に投稿・掲載された場合には、論文後記に貝原財団の研究助成を受けられたことを記載して頂きたいことと、その論文の別冊を財団にお送り頂きたいこととであります。このことは、財団にとっては、残すべき単なる記録であるばかりではなく、財団のいわば貴重な財産ともいうべきものでありますので、是非とも御記憶になって、財団の今後の一層の発展のためにも、必ず実行して頂くようお願い致します。

助成選考にあたって



選考委員・福岡大学名誉教授 小野 順子

今年度は永年の懸案であった助成金の増額が認められ、それに伴い助成対象者数が4名に増加した最初の選考であり、19名と多数の応募がありました。

研究テーマの内訳は、癌関連が5件、発生／再生医療関連が3件で、いずれも例年に比し比率が低く、代って神経、呼吸器、循環器、消化器、感覚器、皮膚、運動器など種々の分野の疾患に対する病因・病態の解明や新しい治療法の開発の試みなどの応募があり、研究分野が非常に広範でありました。高度な技術を要し、研究チームの基礎の上に積み上げられた研究でなければ成果を期待することは困難と見受けられ、施設間差も窺われました。

独創性があり、目的と研究過程が明確に示され、さらに一定の期間に実践可能と思われる研究を選出すべく、選考にはかなり苦慮しました。しかし蓋を開けてみると13名の選考委員の評価は、それぞれの専門分野が異なっているにも拘わらず、比較的絞られており、最終選考にいたりました。

ただ今回選に漏れたご研究もいずれも高いレベルのものであり、是非遂行されて、結果を出されますように、また引き続きご応募いただきますように願っております。

選考過程を通じて、応募者の方々から若いエネルギーを頂いた気がして、実際に実験をしていた頃を懐かしく思い出しました。

平成22年度 研究助成金授与者

(順不同・敬称略)

授与者名	所属機関	研究内容
石井 敦士 (イシイ アツシ)	福岡大学病院小児科学教室・助手	小児交互性片麻痺の責任遺伝子探索と分子病態の解明
石井 文人 (イシイ ノリト)	久留米大学医学部皮膚科学教室・助教	水疱性類天疱瘡における BP230 自己抗原の意義
藤田 逸人 (フジタ ハヤト)	九州大学大学院医学研究院臨床・腫瘍外科・リサーチレジデント	膵癌関連間質幹細胞を標的とした新規分子生物学的治療法の開発
松下 拓也 (マツシタ タクヤ)	九州大学大学院医学研究院寄附講座臨床神経免疫学・客員准教授	多発性硬化症(MS)と Baló 病におけるアストロサイト障害の解析

※平成23年度の募集について

平成23年度の研究助成論文募集は6月下旬頃に各大学宛に応募用要領、申請申込書等をご案内いたします。



小児交互性片麻痺の責任遺伝子探索と分子病態の解明



福岡大学病院 小児科学教室助手
石井 敦士

小児交互性片麻痺 (alternating hemiplegia of childhood: AHC) は生後2～3か月頃に異常な眼球運動で発症、6～7か月頃に片麻痺が出現し、けいれんは6歳頃出現する症例が多く、強直発作や強直間代性発作を来すことが多い。認知機能は低下し、最終的には重度の知的障害や寝たきり状態に至る疾患である。家族例、一卵性双生児とともに発症した例などの報告があるが、ほとんどは孤発例である。血液検査、髄液検査、脳波検査、画像検査でも異常が見出せず確定診断が困難である。

特効薬はなく、一部の症例で電位依存性カルシウムチャネルブロッカーである flunarizine が片麻痺発作を軽度改善すると報告されている。周産期歴に異常なく、各種検査に特異的所見を認めず、生後数か月で発症することより何らかの遺伝子異常が示唆されているが、現在まで責任遺伝子の同定はなされていない。そのため、分子生物学的本態はほとんど分かっていない。

AHC と臨床症状が重なる片麻痺性片頭痛で電位依存性 P/Q 型カルシウムチャネルの $\alpha 1A$ サブユニットを構成する CACNA1A 遺伝子と ATP 依存性 Na^+/K^+ ポンプの $\alpha 2$ サブユニットを構成する ATP1A2 遺伝子での遺伝子変異が報告されたことより、AHC でも検索されたが変異は見いだされなかった。常染色体優性遺伝形式をとる家族性小児交互性片麻痺の1家系で全罹患者に t(3;9)(p26;q34)の転座が報告された。9q34 には電位依存性 P/Q 型カルシウムチャネルの $\alpha 1B$ サブユニットを構成する CACNA1B 遺伝子が座しているが検索の報告はない。

本研究は AHC を“チャネル異常”との作業仮説を立て、チャネル遺伝子を標的に遺伝子変異を同定し、AHC の病態解明を行うことを目的とする。本研究により責任遺伝子が同定された際には、これまでの的確な診断が困難だった症例に対し遺伝子診断が可能となる。また、見いだされたチャネル遺伝子異常を生理学的、分子生物学的に検証することにより本疾患の分子レベルでの病態が明らかになる。その結果、不完全な治療しかない AHC 治療薬の創薬研究に大きく貢献すると考えられる。

水疱性類天疱瘡におけるBP230自己抗原の意義



久留米大学 医学部 皮膚科学教室 助教
石井 文人

疱性類天疱瘡 (bullous pemphigoid 以下 BP) は、高齢者に好発する最も頻度の高い自己免疫性水疱症であり、臨床的に痒みの強い緊満性水疱、組織学的に多数の好酸球を含む表皮下水疱を特徴とする疾患である。本邦では近年の高齢化社会に伴い、本症発症が増加してくるであろう。

主要な自己抗原として 230kDa 水疱性類天疱瘡抗原 (BP230) と 180kDa 水疱性類天疱瘡抗原 (BP180) の 2 種の蛋白が知られており、いずれも表皮基底膜部の表皮と真皮の結合に重要な役割を担っているヘミデスモゾームに存在する。自己抗体の関与により、このヘミデスモゾームの機能を阻害し接着障害をおこし水疱を生ずる病態である。

BP 患者血清の大半は BP180 の細胞外領域の最も細胞膜に近い領域である NC16a に反応し、その病原性についての研究において、BP230 に対する抗体がなくても BP180 に対する抗体のみで水疱が形成され BP180 が BP の病態形成の中心となっていることは疾患モデルマウスによる研究成果により明らかとなった。

一方、もうひとつの自己抗原である BP230 の関連は未だ不明である。種々の仮説が挙げられるが、その本質を捉えた研究は未だ報告はない。

また BP 患者の大半がなぜ高齢者に好発して発症するのか、そのエビデンス・研究は今のところ皆無である。本研究では、BP230 に対する自己抗体に BP 病変発症における病原性の可能性とその意義について研究に取り組むことを計画した。本研究の目的は、BP 患者血中の BP230 に対する自己抗体を持つ症例を検出し、*in vitro* や *in vivo* を用いて、病因解明と自己抗体産生機序の解析と臨床学的特徴の検討を行う。これらの検討により BP 含め自己免疫性水疱症の水疱形成発症メカニズムの一端を解明するものと考え、意義の高いものであると確信している。

膵癌関連間質幹細胞を標的とした新規分子生物学的治療法の開発



九州大学大学院 医学研究院 臨床・腫瘍外科
リサーチレジデント 藤田 逸人

膵癌は、長年の試行錯誤にも関わらず 100 人中 3 人しか根治しない極めて予後不良な癌腫であり、唯一の根治治療である手術療法の成績も充分とは言えない。そのため、膵癌の新規治療法に対する社会的要請度は極めて高く、放射線や化学療法に加えて新規分子標的治療法の開発が進められている。

しかしながら、他の癌腫とは対照的に、*in vitro* や *in vivo* 実験系で有効性が認められた治療法も、臨床研究では明らかな治療予後改善に至っていない。膵癌は *desmoplasia* と呼ばれる豊富な間質増生を病理組織学的特徴とし、この間質が強い治療抵抗性をもたらしていると考えられる。これまでの癌治療の標的は癌細胞自体であったが、本研究では *desmoplasia* を特異的に制御する治療法の開発を目的とする。

これまで申請者は、*desmoplasia* を誘導する膵星細胞 (Pancreatic stellate cells; PSCs) が直接的接触を持つことで膵癌細胞の増殖・生存を支持し (Fujita, *Cancer Sci*, 2009)、活性型 PSCs のマーカーである α -SMA の膵癌間質における発現が、膵癌の予後に関わることを報告した (Fujita, *Pancreas*, 2010)。PSCs は活性化することで細胞外基質や各種増殖因子を産生し、癌細胞の転移・浸潤を促進する。従って、PSCs の活性化を制御することが膵癌の治療につながる。また、申請者らは、CD10 陽性 PSCs という微小な間質細胞集団が膵癌細胞の浸潤を強く促進し、その存在の有無が 予後に強く影響することを世界に先駆けて報告した (Ikenaga, *Gastroenterology*, 2010)。膵癌では転移・再発病巣においても *desmoplasia* を伴うため、このような特定の間質細胞を標的とした新規治療法は、切除不能症例においても十分な治療効果が期待され、画期的な治療法の創出につながる。

多発性硬化症と Baló 病におけるアストロサイト障害の解析



九州大学大学院医学研究院 寄附講座臨床神経免疫学
客員准教授 松下 拓也

多発性硬化症 (multiple sclerosis; MS) は、中枢神経に時間的・空間的に脱髄病巣が出現する代表的な神経難病である。Baló 病は稀な MS の亜型と考えられており、大脳半球の白質に同心円状に脱髄層と非脱髄層とが交互に配列する特徴的なパターンを示す病巣を形成する。臨床的には劇症の脳障害を呈し、救命できた場合でも重度の後遺症を残すことが多い。病理所見上、多発性硬化症は T 細胞や抗体、補体の活性化を伴う像から、オリゴデンドロサイトの障害が主体となるパターンまで多彩な病理像を呈する一方、Baló 病についてはオリゴデンドロサイトの一次的な障害が想定されているが、本症における脱髄機転は全く未解明のままである。

私たちは、Baló 病剖検 4 例において脱髄部、髄鞘残存部ともに広汎にアストロサイトに特異的に発現している水チャンネル分子であるアクアポリン 4 (AQP4) が脱落していることを発見した。日本人に多いとされる、視神経と脊髄を主体に再発性脱髄を来す視神経脊髄炎 (neuromyelitis optica; NMO) においては、この AQP4 に対する自己抗体が特異的に見られることが明らかになっている。Baló 病患者 6 例の血清中には抗 AQP4 抗体が認められないこと、および病理所見上、抗体や補体の血管周囲性沈着も認められないことから、抗体を介さないアストロサイト障害が Baló 病のプライマリーな障害であるという新しい仮説を私たちは提唱している。このようなプロセスは MS でも共通して存在する可能性がある。

本研究では Baló 病、MS、NMO の剖検標本、血清・DNA・髄液を用い、各疾患におけるアストロサイト障害の特徴、共通病態を明らかにすることを目的とする。当施設で管理している再発性中枢神経脱髄性疾患の剖検標本を使用し、剖検記録から MS、NMO、Baló 病のいずれかの診断を確定させ、免疫組織化学染色により疾患ごとの病巣の特徴と共通する所見を、とくにアストロサイトに関係する蛋白を中心に評価し、明らかにする。また各疾患の血清、髄液を収集し、抗 AQP4 抗体の有無を確認するとともに、サイトカインバランスの共通点、相違点を明らかにする。NMO、MS、Baló 病には地域により疾患の頻度に違いがあることが知られているが、こうした差異にアストロサイトに関連する遺伝子上の多型、変異が関係するかどうかについて、AQP4、GFAP を対象として exon 領域の変異、多型頻度を解析する。

特発性中枢神経脱髄性疾患に共通する病態を明らかにし、治療応用を目指す。

平成22年度 貝原守一賞 受賞者

貝原守一賞受賞者は下記のように決定し、平成22年10月9日開催の第70回青藍会（九州大学大学院医学研究院細菌学分野同門会）集談会において授与されました。受賞者の氏名、論文とその内容は以下に記す通りです。

平成22年度受賞者名（敬称略）

・ **Antara Chakraborty**（九州大学大学院医学系学府）

論文題名

“In vitro sensitivity and resistance of 46 *Leptospira* strains isolated from rats in the philippines to 14 antimicrobial agents”

掲載雑誌

Antimicrobial Agents and Chemotherapy 54 (12) : 5403, 2010

内 容

フィリッピンで捕獲したラットの腎臓から分離したレプトスピラ 46 株の抗菌剤感受性を測定したものです。ラットはヒトへの感染源として重要であり、また、動物からの新鮮分離株の感受性試験の結果は最近発表されていなかったために、注目されました。



貝原守一賞について

（青藍会）は、九州大学医学研究院細菌学教室の故戸田忠雄名誉教授が設立され、故貝原守一先生もその一員で助教授として活躍されていた。

貝原守一先生が亡くなられた後、奥様の芳子氏（初代理事長）が故人の遺志を継いで、平成3年に財団を設立され医学を志す若い研究者を助成する活動を始めた際、細菌学教室より研究奨励賞をと申し出であり、青藍会貝原守一賞として平成4年に発足した。

宮崎一郎奨励賞 受賞者

平成21年度、22年度の宮崎一郎奨励賞の受賞者は下記の通りです。

平成21年度受賞者名 (敬称略)

- ・波部 重久 (福岡大学医学部 微生物・免疫学講座 講師)

研究内容

「肺吸虫の生活史に関する研究」

- ・石田 英和 (九州大学大学院医学研究院・感染免疫・熱帯医学分野 大学院生)

研究内容

「マラリア感染とIL-23」

平成22年度受賞者名 (敬称略)

- ・金澤 保 (産業医科大学 教授)

研究内容

「多包条虫に関する研究」

- ・下川 周子 (現 長崎大学熱帯医学研究所)

研究内容

「Entamoeba moshkovskii の病原性に関する研究」

宮崎一郎奨励賞について

宮崎一郎奨励賞は平成6年11月に創設され、貝原財団から九州大学医学部寄生虫学講座同門会(会長 木附 徹雄)に寄付されており、この資金から福岡県内の寄生虫学研究の機関に所属する寄生虫学の研究者に研究目的達成の為、その一助となるよう助成を行っている。

奨励賞授与の基準や方法は九州大学医学部寄生虫学講座同門会で規定が定められている。

財団の主な会議及び事業報告

(1) 評議員会

開催年月日	開催場所	議案
第一回 平成22年6月5日	福岡ガーデンパレス ホテル	1、平成21年度事業報告並びに 収支決算報告承認の件 2、その他

(2) 理事会

会議名及び開催年月日	開催場所	議案
定例理事会 平成22年6月5日	福岡ガーデンパレス ホテル	(1) 平成21年度事業報告の件 (2) 平成21年度収支報告承認の件 (監査報告) (3) 平成22年度事業計画の件 (4) 平成22年度収支予算の件 (5) その他
臨時理事会 平成22年6月12日	財団事務局	平成22年度事業計画一部変更承認の件
臨時理事会 平成22年9月17日	財団事務局	平成22年度助成事業の内容について
定例理事会 平成22年9月24日	財団事務局	平成22年度の事業概況報告について
臨時理事会 平成22年12月19日	財団事務局	平成22年度研究助成金授与者決定の 報告及び承認の件
定例理事会 平成22年12月24日	財団事務局	平成22年度の事業概況報告について
定例理事会 平成23年3月25日	財団事務局	財団事業の現況報告

(3) 助成事業

年 月 日	行 事
平成22年10月4日	貝原守一賞 青藍会・九州大学医学部細菌学教室同門会に研究費を助成
平成22年10月4日	宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室同門会に研究費を助成
平成22年6月11日	平成22年度 研究助成論文応募要領送付 産業医科大、九州大学医学部、福岡大学医学部、福岡歯科大学 久留米大学医学部、九州がんセンター、九州歯科大学
平成22年12月18日	平成22年度 助成金授与論文選考委員会 (於：福岡ガーデンパレスホテル)
平成23年2月5日	平成22年度 助成金授与式開催 (於：福岡ガーデンパレスホテル) 授与者4名に助成

(4) 機関誌発行

年 月 日	行 事
平成22年7月5日	貝原守一医学振興財団会報（第14号）発行



【贈呈式の祝賀会】

有難うございます。

財団理事 柳原 弘毅



平成23年3月11日に発生した、東日本大震災の被害者の皆様にお見舞い申し上げ、福島第一原子力発電所問題の最前線で戦っている皆様に感謝申し上げます。

私が不思議に思ったのは、津波で原子力発電所が止まった時、先ず原子炉は冷さなければ、「水素爆発を起こす。」という当たり前のことを、東電の人も、協力会社の人も対策を取らなかったことです。之は、私の誤解で、5月2日の西日本新聞朝刊第一面によると、

「東京電力福島第一原発事故の際、一号機の原子炉格納容器の弁を開けて放射性物質を含む蒸気を排出した緊急措置「ベント」が、敷地内で働く一部の作業員に知らされないまま始まり進められていたことが1日分かった。

政府や東電が明らかにした経過によると、格納容器内の圧力の異常上昇は12日未明に判明。政府は午前3時ごろからベント実施を発表して東電との協議に入り、1号機で午前9時すぎ、二つの弁のうち、最初の弁の開放作業が始まった。・・・」
とあります。

東電は、働いている人に、知らせずに、危険なことをさせたり、被爆線量計を持たせずに、作業させる等あきれるばかりです。

40年前の米国の技術で作られた福島第一原発は、東芝が造った福島第二原発より古く、制御が難しいのではないのでしょうか。第一原発は水素爆発を起こしたのに、第二原発は、避難区域が10キロ圏内と第一原発と同時に発表されたままで、第一原発が次々に、避難区域を、大きく広げて行ったのとは、大違いです。

事故が起こった当初、公式発表は「とにかく安全だから、でも近くの方は避難して下さい。」という訳の分からない事ばかりで、東大の平野龍五教授などの説明と、イギリス大使館が行った化学顧問による会見などで何故爆発したかの理由が分かりました。

更に、5月4日の西日本新聞第3面によると、

「放射性物質が外に漏れないように5重の壁でしっかり閉じ込めている。」燃料棒は核分裂が止まっても高熱を出し続けて危険だから、水で冷やし続けたいいけない。本来圧力容器

内外に水を循環させて燃料棒を冷やす非常用炉心冷却装置が働く。ところが津波の影響で発電機が故障、冷やすことが出来なくなった。圧力容器内の水は蒸発を続け水位が下がったため、むき出し状態になった燃料棒はどんどん過熱。3基とも第2の壁の燃料棒が一部破損し、第一に壁のペレットから放射性物質が漏れ出したみたいだ。・・・」

とあります。

東北電力の送電線が近くにあったので、現在はそれを利用しているようですが、3月11日か12日に利用していればよかったのにとくやまれます。

先年活動した、警固断層が、走っている福岡市も、隣の糸島市の一部が、玄海原発から30キロ圏内に入るので、色々と検討が為されているようです。

仏国では、電力の8割を原発に依存している由で、反対の声も在るけれど大統領は原発依存を推進していますが、独逸では、首相を先頭に原発建設反対を叫んでいます。今回の福島第一原子力発電所の事故で、東芝が進めていた東南アジアへの商談は、御破算の様子です。

我が国は、原発無しで、果たして産業の源である、電力が賄えるのでしょうか、不安です。





私の文藝春秋の読者歴は50年になる。思い起こすとその時代、時代を反映して印象に残っている記事がいくつか浮かんでくる。

1 酒席の話題 東京オリンピックの前後のことであるが、日経連専務理事の前田一（マエピン）さんと総評議長の大田薫さんの対談の一話に「酒の席では政治と宗教の話をしてはいけない。下ねたの話が最も無難」とあった。その頃、私の酒の師匠格の一人が、天文館（鹿児島）の料理屋で仲間と飲酒中にある宗教の悪口を言ったところ、傍らにいた仲居さんからお代は要らないから帰って下さい、といきなり追い出された、という話を聞いていたので、経済界と労働界の両大御所の話は興味深かった。それ以来、私は酒を飲んでいる時は政治と宗教の話は避けて通るようにしている。

2 終末期の平常心 つい1、2年前のことであるが、存命していればノーベル物理学賞の受賞間違いなしといわれていた物理学者戸塚洋二さんの「余命19月と告知されて」という本人寄稿の記事が数回掲載されていた。その最終回であったか、立花隆さんとの対談での、ガン闘病中の平常心のくだりには胸を打たれるものがあった。自分の生死についても学者らしい冷徹な観察と、感情の起伏の葛藤が感ぜられて、深刻に考え込んだものである。そして、予告された寿命を数か月超えて戸塚さんは亡くなられた。

私ならどうであろうか。平常心を保つにはどうしたらよいか、誰しも皆考えることだと思う。終末期となれば尚更のことであろう。

日頃の修練が必要なのか、宗教への帰依がよいのか、あるいは正解はないのか。どなたか教えていただきたいものである。

3 巻頭言 文藝春秋の随筆欄はなかなか面白いものであるが、その巻頭言に登場するのは当代一流の文筆家で、長年にわたって担当されてきたようである。しかし、一流であるだけに格調は高いが、文章は難解で、読むには辛抱がいる。

最近辞された阿川弘之さんは、旧ひらがな使いに固執され、出身の海軍の話がお好き

なようであったが、便秘に苦しみ、薬を2倍服用したところ夜中に失敗したなど臆面もなく書きしるし、あれやこれや世の中面倒くさくなったので90才を境に筆を擱く、と行って去っていかれた。

気骨のあった作家の引退は残念である。

阿川さんの前の巻頭言は、司馬遼太郎さんでこれも長い間巻頭を飾っていたように思う。

題目は「この国のかたち」であったと記憶しているが、司馬文学の晩年期にあったためか、難解な文章であった。

司馬遼太郎作品といえば、昭和30年から40年代作の「国取り物語」の斉藤道三や「峠」の河井継之助の人物像を夢中で読んだものである。そして、「竜馬がゆく」の一節、人より三尺上から見れば世の中がよく見える、の表現には思わず惹きつけられた。

- 4 この数年の政局ものは、人の足を引っ張るような記事が目立ってきて、あまり感心できない。政治の裏表は読者の興味をそそるものであるが、やはり建設的な記事が望ましい。その中では、小泉進次郎氏の、親父の殻を脱し、今の苦境に耐え、国民の声に耳を傾けて地道に自民党の再生に努力したい、という若い政治家らしい抱負を読んで好感を抱いた。勉強を重ねて大成することを期待したい。





昭和17年(1942) 31歳

戦争と醫學

貝原守一

近代科學勃興してから以後の戦争は、他の科學の部門に對して促進的に影響を及ぼしたと同様な意味で、確かに、然し大して著明ではないが醫學に對しても良好な影響を與えたと思はれる。

世界大戦の際各國軍隊間に突發的に大流行を來して一大恐慌を起こさせた嫌氣性菌に基づく創傷感染に對する細菌學的及び一般外科的知見の進歩はその著しい一例であり、各種化學治療劑に於ける進歩も、戦争による合成化學の興隆に負ふところが多いのだ。

尚普佛戦争の際に、種痘を施行してゐたプロシヤ軍が天然痘に侵されることが少なく、僅か三〇〇名足らずであつたのに反し、種痘を行つてゐなかつたフランス軍が二萬餘の罹患者を算したことが、種痘普及の最大の直接的原因となり又この戦争が當時尚まだ採用が躊躇されてゐた防腐的リリスター氏法による創傷の治療法を廣く採用させる機縁となつたことは別な意味での戦争の良い影響だといへる。

成程、現代に於ては、眞に科學が戦争の必然性と結合する場合、戦争は或る意味に於て科學の進歩に貢献するものだと思へられよう。然しこゝに考へねばならぬことは、この場合進歩するものゝ根底に存する國家或るは民族自體の眞の優秀な科學科學性が最大の重要因子をなすことが忘れられてはならない。このことは勿論醫學自體にとつても當嵌ることであり、たとへ戦争に於ける醫學が他の科學の諸分科とは幾分異なつた性質をもつにしても、醫學に於ける正しい科學的根柢がなくては、戦争によつても決してより進展し得る理由はないといふことは明らかだ。

この意味に於いて、現下に於てこそ醫學は積極的に反省さるべき多くのものを持つであらう。

九大新聞 昭和十三年十一月五日発行

前号に引続き「戦争と医学」(四回連載のうち第三回目)を掲載します。

昭和十三年当時の九大新聞からの転載にあたり漢字及びかなづかいは出来る限り原文に忠実に掲載しました。